



転任に よせて

う蝕学分野
興地隆史

平成27年1月1日発令により、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔機能再構築学講座歯髓生物学分野（旧歯科保存学第三講座）教授を拝命し、13年6ヶ月にわたってお世話になりました新潟大学歯学部を離れることとなりました。貴重な紙面をお借りして、ここに転任のご挨拶を申し上げます。

新潟大学歯学部には、設置後間もない歯学部附属病院総合診療部教授として平成13年7月に着任しました。当時すでに「歯学教育改革」がキーワードでありましたが、この社会の要請に応えるべく、臨床実習や卒後臨床研修の実施システムの構築・整備に携わるとともに、臨床歯科医学全般の教育と臨床にも従事いたしました。この間、講座間の縦割り体制に「横串をクロスさせる」バランス感覚を多少なりとも涵養できましたことは、大変貴重な経験であったように思われます。

その後、平成15年10月よりう蝕学分野を担当し、細田裕康教授、岩久正明教授が築いてこられた保存修復学の先端的業績に、私の専門である歯内療法領域をも付け加えることを目標として、その運営に取り組んでまいりました（その実際については、本誌平成23年1号にも寄稿させていただきました）。その結果、臨床面では、歯科用実体顕微鏡やNi-Tiロータリーファイルなどの先端的器材の導入により効率化・難症例対策の両面で進歩を図ることができたことと自己評価しています。また研究面では、バイオロジーとバイオマテリアルサイエンスを二本の柱とし、さらに臨床との連携を原点かつ目標としながら、歯髓の創傷治癒と再生、覆髓用新規ケイ酸カルシウム系バイオマテリアル、歯髓炎・根尖性歯周炎の免疫病理、口腔バイオフィルム制御などに関する幅広い内容を手掛

けることができました。ここに至るまでの教室スタッフ一同の多大な協力には感謝致しております。

さらに平成22年4月からは医歯学総合病院副院長（歯科総括担当）を拝命しました。一期目の三年間は外来診療棟新築への対応に追われたかの感がありますが、多くの方々のご尽力に支えられ、設計、移転（平成24年11月）とその後の整備を進めることができました。その結果、移転前後各1年間の比較で、チェア一台数が約2/3に減少したにもかかわらず、診療単価が同等のまま患者数が約一割増加するという実績が得られました。外来診療に関わる全ての皆様のご協力の賜物であることは言うまでもありませんが、部署間の壁を排した設計、診療ブロック制、チェア共同使用などの新しい運用コンセプト（本誌平成25年1号もご参照下さい）が誤りではなかったことには、心底安堵したものです。

う蝕学分野はすでに改修・移転が完了しており、その運営についても、約10年を経てようやく臨床、研究、教育とも安定して業績を重ねることが可能となったと自己評価いたしております。このような矢先での転任となりましたことには、「安住の地を去る」かのような複雑な想いを禁じ得ません。病院の運営についても、医科歯科連携診療体制の構築などの案件を抱えた中での任期途中の退任となり、高木律男現総括副院長をはじめとする関係各位には大変心苦しく思っております。

現在の新潟大学歯学部は、前田健康歯学部長の強力なリーダーシップのもと、わが国で最も「勢いのある」歯学部の一つであるといっても過言ではありません。現在進行中の歯学部校舎の改修が類を見ないほどの規模であることは、とりもなおさずこの「勢い」が評価された結果でありましょう。この発展を肌で感じることもできた経験を糧として、転任先においても教育・研究・臨床に鋭意取り組む所存です。ご指導・ご鞭撻を賜りました多くの方々に深く感謝いたしますとともに、新潟大学歯学部の更なる発展を心からお祈り申し上げます。